

あるガンマ行列の分解定理

中島 秀斗 統計的機械学習研究センター 特任助教

1 概要

リーマンゼータ関数 $\zeta(s)$ は次の関数等式を満たす。

$$\zeta(1-s) = 2(2\pi)^{-s}\Gamma(s) \cos \frac{\pi s}{2} \zeta(s) \quad (s \in \mathbb{C}).$$

この等式は、リーマンのクシー関数 $\xi(s)$ を用いて記述すれば

$$\xi(1-s) = \xi(s), \quad \xi(s) := \frac{s(s-1)}{2} \pi^{-\frac{s}{2}} \Gamma\left(\frac{s}{2}\right) \zeta(s)$$

のように、より対称性が高い形に書き換えることが可能である。概均質ベクトル空間の理論は、関数等式を満たす(多変数)ゼータ関数を系統的に構成する手法を与える。そのような多変数のゼータ関数に対しても上記のような現象が見られるのかどうか、あるいはどのような条件が必要か、といった問いが自然に提起される。

2 記号およびガンマ行列の分解例

$\Gamma(s)$ は通常のガンマ関数とし、 $c(z)$, $s(z)$ および $e[z]$ は次で定義する。

$$c(z) := \cos \frac{\pi z}{2}, \quad s(z) := \sin \frac{\pi z}{2}, \quad e[z] := \exp\left(\frac{\pi\sqrt{-1}}{2} z\right).$$

例1.

Shintani (Chapter 1; 1975), F. Sato (§§7.2 Example (B); 1982) では、

$$\xi\left(s_1, \frac{3}{2} - s_1 - s_2\right) = M(s_1, s_2) \xi^*(s_1, s_2)$$

という関数等式が与えられている。ただし $M(s_1, s_2)$ は

$$M(s_1, s_2) := \frac{\sqrt{\pi}}{2} \left(\frac{2}{\pi}\right)^{s_1+2s_2} \Gamma(s_2) \Gamma\left(s_1 + s_2 - \frac{1}{2}\right) \begin{pmatrix} s(s_1+2s_2) & s(s_1) \\ c(s_1) & c(s_1+2s_2) \end{pmatrix}$$

で定義される正方行列である。このとき $M(s_1, s_2)$ は、直交行列 $\tau := \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$ による共役をとれば、次のように対角行列と直交行列の積に分解される。

$$\tau M(s_1, s_2) \tau^{-1} = D_-\left(s_1 + s_2 - \frac{1}{2}\right) \cdot \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \cdot D_+(s_2), \quad D_{\pm}(s) := \frac{2^s \Gamma(s)}{\pi^s} \begin{pmatrix} c(s) & 0 \\ 0 & \pm s(s) \end{pmatrix}$$

3 等質錐に付随するゼータ関数のガンマ行列

階数 r の等質錐が与えられたとき、それに付随して(局所)ゼータ関数 $\Phi(f; s)$ が定義でき、それは、双対錐の(局所)ゼータ関数 $\Phi^*(f; s)$ との関係式として、次の形の関数等式を満たす (cf. [2])。

$$\Phi(\hat{f}; s) = \frac{\Gamma(\alpha(s))}{(2\pi)^{|\alpha(s)|}} A_r(\alpha(s)) \Phi^*(f; \tau(s)) \quad (s \in \mathbb{C}^r).$$

ただしベクトル $\alpha \in \mathbb{C}^r$ に対して $\Gamma(\alpha) = \Gamma(\alpha_1) \cdots \Gamma(\alpha_r)$ であり、 $\alpha(s)$, $\tau(s)$ はそれぞれ適切な \mathbb{C}^r 上のアフィン変換である。また \hat{f} は f のフーリエ変換を表しており、 $A_r(\alpha)$ は、 $\mathcal{I}_r := \{1, -1\}^r$ を用いて

$$A_r(\alpha) = \left(\exp \left\{ \frac{\pi\sqrt{-1}}{2} \left(\sum_{j=1}^r \varepsilon_j \delta_j \alpha_j + \frac{1}{2} \sum_{1 \leq j < k \leq r} \varepsilon_j \delta_k n_{kj} \right) \right\} \right)_{\varepsilon, \delta \in \mathcal{I}_r}$$

により定義される正方行列である。 $A_r(\alpha)$ の定義に現れた $n_{kj} \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ は等質錐の構造情報である。さて、直交行列 $J^{(j)}$ を帰納的に

$$J^{(1)} := \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}, \quad J^{(j)} := \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} J^{(j-1)} & J^{(j-1)} \\ J^{(j-1)} & -J^{(j-1)} \end{pmatrix}.$$

と定義し、さらに非可換元 a_i に対して $(\prod^{\text{rev}})_{j=1}^r a_j := a_r \cdots a_1$ とおく。

定理 ([1])

関数等式のガンマ行列は、 $J^{(r)}$ に関して、次の行列と共役である。

$$2^r \begin{pmatrix} I_{2^{r-1}} & 0 \\ 0 & \sqrt{-1} I_{2^{r-1}} \end{pmatrix} \prod_{j=1}^r \text{rev} \left\{ \prod_{k=j+1}^r \exp(n_{kj} X_{kj}) \cdot \tilde{D}_j^{(r)}(\alpha_j) \right\}$$

すなわちガンマ行列は、等質錐の構造情報にのみ依存する直交行列 $\exp(n_{kj} X_{kj})$ と、1つの変数にのみ依存する対角行列 $\tilde{D}_j^{(r)}(\alpha_j)$ たちの積に分解される。ただし $r \geq 3$ とし、 X_{kj} および $\tilde{D}_j^{(r)}(\alpha_j)$ は、

$$X_{kj} = \frac{\pi}{2} \cdot \underbrace{I_2 \otimes \cdots \otimes I_2}_{r-k} \otimes \underbrace{A_2 \otimes \cdots \otimes A_2}_{k-j-1} \otimes \underbrace{R_2 \otimes I_2 \otimes \cdots \otimes I_2}_j,$$
$$\tilde{D}_j^{(r)}(\alpha_j) = \begin{cases} \frac{\Gamma(\alpha_1)}{(2\pi)^{\alpha_1}} \begin{pmatrix} D_1^{(r)}(\alpha_1) & 0 \\ 0 & D_1^{(r)}(\alpha_1-1) \end{pmatrix} & (j=1), \\ \frac{\Gamma(\alpha_j)}{(2\pi)^{\alpha_j}} \begin{pmatrix} D_j^{(r)}(\alpha_j) & 0 \\ 0 & D_j^{(r)}(\alpha_j) \end{pmatrix} & (j=2, \dots, r), \end{cases}$$

ここで $D_j^{(k)}$ は、次のように帰納的に定義される対角行列である。

$$D_1^{(2)}(\alpha) := \begin{pmatrix} c(\alpha) & 0 \\ 0 & s(\alpha) \end{pmatrix}, \quad D_2^{(2)}(\alpha) := \begin{pmatrix} c(\alpha) & 0 \\ 0 & -s(\alpha) \end{pmatrix},$$
$$D_1^{(r)}(\alpha) := \begin{pmatrix} c(\alpha) I_{2^{r-2}} & 0 \\ 0 & s(\alpha) I_{2^{r-2}} \end{pmatrix}, \quad D_2^{(r)}(\alpha) := \begin{pmatrix} D_1^{(r-1)}(\alpha) & 0 \\ 0 & D_1^{(r-1)}(\alpha+1) \end{pmatrix},$$
$$D_k^{(r)}(\alpha) := D_{k-1}^{(r-1)}(\alpha) \otimes I_2 = \begin{pmatrix} D_{k-1}^{(r-1)}(\alpha) & 0 \\ 0 & D_{k-1}^{(r-1)}(\alpha) \end{pmatrix} \quad (k=3, \dots, r).$$

3.1 補足

- この定理は、局所ゼータ関数のなす空間において、基底をうまく選ぶと、ガンマ行列による変換は、底空間の構造情報から定まる直交行列と引数が1変数のみの対角行列たちの積という、非常にきれいな形に分解されることを示している。
- 今のところ本定理の応用は見つかっていないが、ガンマ行列の解析に有効に活用できるのであれば、他の概均質ゼータ関数のガンマ行列の解析にも応用が期待できる。
- 等質錐の構造情報 n_{kj} がある条件を満たすときには、さらにリーマンのクシー関数のように、関数等式を完備化することもできる (cf. [1])。

例2.

$r=2$ のとき、 \mathcal{I}_2 の順序を適当に定めると $A_2(\alpha)$ は

$$A_2(s) = \begin{pmatrix} e^{[+s_1+s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1-s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1-s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1+s_2+n_{21}]} \\ e^{[+s_1-s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1+s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1+s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1-s_2+n_{21}]} \\ e^{[-s_1-s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1+s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1+s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1-s_2-n_{21}]} \\ e^{[-s_1+s_2-n_{21}]} & e^{[-s_1-s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1-s_2+n_{21}]} & e^{[+s_1+s_2-n_{21}]} \end{pmatrix}$$

となる。定理により、 $A_2(s)$ は次の行列と $J^{(2)}$ に関して共役である。

$$2^2 \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & 1 & & \\ & & \sqrt{-1} & \\ & & & \sqrt{-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c(s_2) & & & \\ & s(s_2) & & \\ & & c(s_2) & \\ & & & c(s_2) \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} c(n_{21}) & -s(n_{21}) \\ s(n_{21}) & c(n_{21}) \\ & & c(n_{21}) & -s(n_{21}) \\ & & s(n_{21}) & c(n_{21}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c(s_1) & & & \\ & s(s_1) & & \\ & & c(s_1-1) & \\ & & & c(s_1-1) \end{pmatrix}.$$

参考文献

- [1] H. Nakashima, Decomposition of gamma matrices of local zeta functions associated with homogeneous cones, to appear in Tohoku Math. J., 21 pages.
- [2] H. Nakashima, Functional equations of zeta functions associated with homogeneous cones, Tohoku Math. J. **72** (2020), 349–378.